



親、教師、
言語聴覚士が使える

ワークブック

どもる子どもの生きぬく力が育つ

吃音

伊藤伸二
吃音を生きる子どもに同行する教師の会
編著

特別寄稿

石隈利紀 筑波大学教授・学校心理学

解放出版社

吃音

親、教師、
言語聴覚士が使える

ワークブック

どもる子どもの生きぬく力が育つ

伊藤伸二

吃音を生きる子どもに同行する教師の会
編著

特別寄稿

石隈利紀

筑波大学教授・学校心理学

解放出版社

◎……はじめに

伊藤伸二

「吃音は、治療法がないから、どう指導したらいいか分からない」

「アメリカのスピーチセラピストの96%が吃音に苦手意識をもっている」

このように言われるのは、「治りたい」「治したい」との吃る本人や親の切実な願いがあるからなのだろうが、臨床家も「吃音を治す、改善する」にこだわるからだろう。

吃音は、「治すべきか、受け入れるべきか」の議論は、本来、治せる時代がきて成り立つことだ。治せる時代がきても、「そのままでいい」と言う人は少ないだろう。ところが、吃音は、100年以上の治療の歴史がありながら、治せないでいる。

アメリカ最新の統合的アプローチ、「ゆっくり、そっと、やわらかく」の流暢性促進技法も、身につけ生活に生かすのが難しいことは、長年の論争の歴史や、セラピストの苦手意識が物語っている。この現実があるにもかかわらず、「治す」にこだわるのは、治ったという人、治ったかのような状態になる人がいるからだろう。しかしそれは、治療の結果ではなく、自然な変化によるものがほとんどだ、との認識がもてないからだろう。

私も仕事柄、人前ではあまり吃らなくなつた。テレビの前では吃らないが、普段は吃り、「吃音は治らない」と自分を「吃音キャスター」と言うアナウンサーがいる。吃ってセリフが言えず、2日間、撮影がストップする経験をしても、「どもりでよかった」と言う女優がいる。

人生を精一杯生きるなかで吃音は変わる。吃音を受けとめる教師や友だちとの学校生活の中で、自分を率直に表現し、吃音が変わっていった子どもを私はたくさん見てきた。この、生活に出ていくのを阻む要因のひとつが、「吃音は治る、治せるはずだ」の思い込みだと、私は考えている。

私は21歳のとき、初恋の人や吃る仲間と出会い、チャールズ・ヴァン・ライパー博士は30歳である老人と出会い、スキヤットマン・ジョンは53歳のとき、CDで吃音を公表して、「吃ってもまあいいか」と吃る事実を認める「ゼロの地点」に立つことができた。それまでは、3人とも、人生の課題から逃げ、多くのものを失う苦悩の人生だった。吃音は、この地点に立つまでが難しい。それまでが、吃音臨床だと私は考えている。

この本は、ルポルタージュ（現地報告）の一種だと思う。ルポとは、「何々であるべきだ」がないものだ。世界の吃音臨床の報告であり、吃る人の人生、実践の報告だ。

「吃音を治す、改善する」にこだわるアメリカの臨床に比べ、子どもの生きる力を育てようとする日本の臨床は、素晴らしい。「アメリカのセラピストのように、勉強し、治療技術を磨くべきだ」などと、批判されてもひるむことはない。親や臨床家は、これまでを肯定した上で、少し吃音とのつきあい方のレパートリーを増やしていただければうれしい。

人間、悩みのない人はいないだろう。誰もが、弱い部分や悩みや劣等感などのテーマをもつて生きている。その人間が、吃音をテーマに生きる子どもと、どう生きるかを考えれば、親、教師、言語聴覚士が、子どもと一緒に取り組むことはたくさんある。

吃音ワークブック——どもる子どもの生きぬく力が育つ 目次

はじめに	1
この本の特徴	4
吃音を生きる伊藤伸二の人生	5
第1章 吃音のとらえ方の基本	11
1 私たちはこう考え、取り組む	12
2 吃音治療から、自己概念への働きかけへ	15
3 早期治療より早期自覚教育	16
4 ゼロの地点に立つ	17
コラム セラピー中心主義とサバイバル・生活中心主義の比較表 伊藤伸二	18
吃る人へのメッセージ チャールズ・ヴァン・ライバー／スキヤットマン・ジョン	20
第2章 親との出会い	23
初回保護者面談 渡邊美穂	24
コラム 私の父親と母親 伊藤伸二	26
ワーク① どもりの原因について考える	28
ワーク② どもりは治るか	30
コラム アメリカの激しい対立論争 水町俊郎	33
ワーク③ 親のニーズ	34
ワーク④ ことばの教室のメニュー	36
コラム ことばの教室への応援歌 伊藤伸二	38
第3章 子どもと吃音について考える	39
初回の子ども（1年男子）とのやりとり 高木浩明	40
コラム 2003年吃音親子サマーキャンプ 小学校3・4年生のグループの話し合い 伊藤伸二	43
ワーク⑤ 吃音とは何か	44
ワーク⑥ どんなとき吃るか	46
ワーク⑦ どもりは治るか	48
実践 どもりは治るか1 高木浩明	50
実践 どもりは治るか2 渡邊美穂	51
ワーク⑧ 子どものニーズ	52
コラム 吃る僕からのメッセージ 伊藤伸二	54
第4章 吃音と向き合う	55
ワーク⑨ 言語関係図をつくろう	56
実践 言語関係図をつくってみよう 高木浩明	58
ワーク⑩ 吃音方程式	60
北風と太陽	62
ワーク⑪ 吃音の氷山を書いてみよう	64
コラム 吃るあなたへのメッセージ ジョゼフ・G・シーアン	66
コラム 笑いとユーモア 伊藤伸二	68
第5章 吃音評価	69

吃音評価	70	
ワーク⑫	対人関係・人間関係のチェックリスト	72
ワーク⑬	吃音に対する気持ちや考え方のチェックリスト	74
ワーク⑭	行動のチェックリスト	76
実践	中学生のAと吃音自己チェックをして 佐々木和子	78
コラム	吃音の理解 伊藤伸二	80
第6章 吃音を生きぬくために		81
1	吃音の理解——5通の手紙	82
	もうすぐ小学生になるゆう子ちゃんへ 渡邊美穂	82
	母から中学生になる大輔へ 佐々木和子	83
	横田さんの担任の鈴木先生へ 溝上茂樹	84
	吃る子どもからクラスのみんなへ	85
	どもりのことを聞いてください 佐々木大輔	85
	どもっても気にしないで 栗崎竜一	85
コラム	苦惱は海の中に 宮崎聰美	86
2	共同体感覚がなぜ必要か	87
	自己肯定……私は私のままでいい	89
	他者信頼……私はひとりではない	90
	他者貢献……私には力がある	91
3	コミュニケーションの力が育つには	92
実践	ぼくが・わたしが大人になったら——吃る人の職業 高木浩明	94
ワーク⑯	どもりカルタをつくろう	96
実践	「どもりカルタ」に取り組んで 渡邊美穂	97
実践事例	Kくんから学んだこと 高瀬景子	98
実践活動	吃る子どものグループ活動 伊藤伸二	102
	なおしたいという気持ちから 松下詩織	104
	吃音親子サマーキャンプでの劇づくり 渡辺貴裕	104
ワーク⑯	著名人で吃る人	106
第7章 「仮面のことば」ではなく、「自分のことば」が育つために		111
1	吃音は自然に変化する	112
2	自分のことばが育つ	113
3	情報伝達のことばと自己を語ることば	116
4	吃音を治す努力の否定	117
5	世界の吃音治療の現状	118
6	竹内敏晴さんから学んだ、日本語の発声・発音の基本	121
7	日本語の発音の基本について、子どもと学ぶ	122
8	声を出す基本を、子どもと一緒に取り組むなら	123
9	生活の中で話すとき、考え、心がけてきたこと	124
10	ていねいに話す	126
特別寄稿	子どもが生きることをどう援助できるか 吃音への援助から学ぶ 石隈利紀	129
おわりに	141	
吃音を生きる子どもに同行する教師の会	142	

この本の特徴

◎企画の段階から伊藤伸二と15人の教師の会の仲間と取り組む

7回の合宿をはじめ、何度も話し合い、書いたものを読み合わせ、実践し議論し、修正した。最終段階での毎月の合宿は、白熱し、吃音の豊かさ、深さを実感した。メンバーの半数が吃音に深く悩んだ経験があり、半数が吃音を治すことにこだわらない吃音臨床をしてきた教師だ。その体験を出し合ってまとめた。

私が中心に書いているが、仲間が書いたものは、文頭に執筆者の名前を入れた。それ以外はすべて伊藤が書いた。文中で「私は」「僕は」とあるのは、伊藤伸二のことである。

◎用語について

吃音治療、治療法、吃音症状、流暢性、言語訓練、民間吃音矯正所などの用語を私たちは普段使わないし、使いたくなかった。しかし、従来の吃音臨床と比較して論議するには、同じ用語を使わないと、論点が曖昧になる。そこで今回は使うことにした。

◎ワーク・実践について

- 共同体感覚が育つ、自己肯定・他者信頼・他者貢献のワーク
- コミュニケーションの力が育つ、自己概念・傾聴・自己開示・アサーションのワーク
- ことばの力が育つ、歌や詩を読むレッスン・表現のワーク

これらのワークは、私たちがしているものを紹介したかったが、私たちが紹介しなくとも、優れたワーク集や実践例がたくさんある。それらを読んでいただくとして、私たちでなければ書けない、吃音に直接関係があるワークを厳選した。

◎生の声を集めたドキュメンタリー

吃ってはいたが元気だった私が、小学2年生の秋、吃音に強い劣等感をもち、深く悩んだ。

私は21歳で、吃りながら生きる「ゼロの地点」に立った。ひとりの吃る人間が体験したことを振り返り、整理した人間ドキュメンタリーだ。私個人の体験がベースになっているが、私が44年間の活動の中で直接出会った数千人の吃る人々、1000人を超える吃る子どもたち、教師の会のメンバーが出会った子どもたちの体験が背景にあり、普遍的なものになっていると思う。

◎大阪吃音教室の、週に一度のプログラム

1986年の第1回吃音問題研究国際大会の翌年4月から、NPO法人・大阪スタタリングプロジェクトの大坂吃音教室の「吃音と上手につき合うための吃音講座」のプログラムが始まった。週に一度集まり、吃る人たちと一緒にワークをして話し合い、整理してきた。そのプログラムは私たちに役に立ったものばかりだ。これがこの本のベースになっている。

吃音を生きる伊藤伸二の人生

吃音に強い劣等感をもったきっかけ

小学2年生の秋の学芸会で、セリフのある役を外されたことで僕は、吃音をマイナスのものと意識した。吃っても、よく本読みも発表もし、友だちも多かったのが、学芸会が終わる頃には、まったく別人になっていた。担任は、セリフの多い役はかわいそうだと配慮したのだろうが、僕はとても傷ついた。「吃音は悪い、劣った、恥ずかしいもの」と、先生からレッテルを貼られることになるのだから。吃音に強い劣等感をもち、「吃るくらいなら話すのをやめよう」とのライフスタイルをもった。発表や音読はしなくなり、友だちとも話さなくなり、クラスや学校の役割も一切しなくなった。ひとりぼっちの給食や、休み時間、運動会や遠足がとても嫌だった。劣等感が強くなり、人生の課題から逃げてしまう劣等コンプレックスに陥った。

苦しかった中学校、高校時代

中学生活で唯一の救いはクラブ活動だったので、高校でも卓球部に入った。入学式で見始めた女生徒も卓球部について喜んだのもつかの間、新入生の男女合宿を知らされた。彼女の前で吃りたくないだけの理由で、迷いに迷った末、合宿の前日に僕は卓球部をやめた。大事な、好きなことからも逃げたことで、一層落ち込んだ。吃るのは仮の姿で、どもりが治ってからが本当の人生が始まるのだと、治ることばかりを夢み、勉強も、遊びもしない高校生活を送った。高校2年生のとき、よく当てる国語の授業に出られなくなり、不登校になった。国語の先生に、音読の免除を願い出てやっと高校を卒業した。早く高校を卒業し、音読や発表から解放されたい。どもりを治すために東京に行きたい。そう思うことが、生きる支えだった。

民間吃音矯正所の体験

どもりを治したくて、東京の大学に行った。1年生のとき、「どもりは必ず治る」と宣伝する東京正生学院の寮に1ヶ月入って、朝から夜遅くまで吃音を治すために努力した。

院長は、極端にゆっくり話す「吃らずに話す方法」を教えてくれた。

息子の副院長は、アメリカの治療法を勉強して、吃る不安や恐怖があっても、どんどんしゃべろうと、わざと吃る「随意吃音」や、「軽く、楽に吃る方法」を教えてくれた。

院長の方法で、喫茶店で「カーレーラーイース」と言うと、嫌な顔をされ、笑われた。吃らないが、僕のことばじゃない。吃って自分のことばで言ったほうがよほどいいと思った。

副院長のすすめた「随意吃音」を練習したら、吃音がひどくなり、話せなくなった。

この学院では、アメリカで激しく対立する2つの方法を同時に教えてもらったことになる。1ヶ月の寮生活の、午前中は呼吸・发声練習、午後は「警察はどこですか」など毎日100人以上

に声をかける街頭訓練と上野公園の西郷隆盛の銅像前や山手線の電車の中での演説練習。そして、夜は円く輪になり遅くまで話し込んだ。しかし、そのとき矯正所に来ていた300人のうち誰ひとり治らなかった。

ゼロの地点に立つ

東京正生学院は僕の心の故郷で、今でもとても感謝している。初めて大勢の吃る人と出会ってほっとした。吃音の悩みを話すと、みんなが聞いてくれた。みんなの話も、僕が体験したことばかりだ。吃っても平気で話せ、話す喜びを初めて味わった。そして、恋人などできるはずがないと考えていたのが、「吃って一所懸命話す伊藤さんが好きだ」と、そのままの僕を愛してくれた人と出会って、「吃るままでも、まあいいか」と思えるようになった。

一所懸命努力しても治らなかったのだからと、あきらめがついた。治らないなら、吃っても話そうと決意した。副院長の「吃ってもしゃべろう」のアメリカ言語病理学の教えが支えてくれた。

話すことから逃げない生活のはじまり

家が貧しかったので、学費・生活費すべてを自分で稼がなくてはならない。新聞配達店の住みこみから大学生活はスタートしたが、夏休みに東京正生学院への入寮生活のためにやめた。「吃ってもいい」と決心がついたので、新聞配達店には戻らずに、百科事典のセールス、デパートの売り子、飲食店のボーイなど、話さなければならないアルバイトに切り替えた。嫌な経験もたくさんしたが、吃っても人はちゃんと僕の話を聞いてくれた。吃ると何もできないと考えていたのは思い込みで、できないことは何ひとつないことを知った。

吃りながら、今を生きるのが僕の人生だと気づいた。

吃る人のセルフヘルプグループ・言友会の創立とその変遷

1965年秋、せっかく出会えた人たちと別れたくない、僕は吃る人の会、言友会を作った。リーダー経験がない僕が、会長に次ぐ幹事長になった。自分が作った会の発展のために、吃りながら必死に活動した。失った学童期・思春期を取り戻すかのようだった。

当初は、治す思いが捨て切れず、例会は、発声・呼吸訓練を中心だった。しかし例会以外のさまざまな活動が楽しかった。グループに大勢の体験が集まることで、治療方法そのものが間違いで、治るものではないことに気づき始めた。障害者運動、青年運動などに積極的に加わり、吃音に対する考え方が変わった。吃音矯正所と同様吃音は治らなかったが、吃りながらも行動する人が育ち、あきらめていた教師の仕事につくなど自分の人生を変えていく人もあらわれた。

大阪教育大学・言語障害児教育教員養成課程の教員

1972年、会の後輩が、大阪教育大学の言語障害児教育教員養成課程に行くことになった。吃音を専門的に学び、会の活動を整理する機会だと考え、一緒に行くことにした。主任の神山五郎教授は、耳鼻科の医師であり、自分自身が吃音に悩み、アメリカの大学院に留学して言語病理学博士になり、日本に新しい学問を紹介した人だ。ほとんど勉強してこなかった僕は、興味のある

吃音や言語障害全般や心理学の勉強だから、一所懸命勉強した。そして、大阪教育大学の教員となり、ことばの教室の教員を養成する仕事についた。その後、自身は吃らないが、ウェンデル・ジョンソンに直接学び、吃音研究の第一人者である心理学の内須川 洋 ^{うちすがわひろし} 教授が大阪教育大学に赴任された。日本を代表する、タイプの違う2人の吃音研究者に身近で学べたことは幸いだった。

吃音を治す努力の否定

僕の言語障害研究室には、全国から大勢の吃る人が、学生や研究生となって集まつた。その人たちと、吃音症状ではなく、消極的な行動や問題との直面を避けることなど吃音に悩む人の人生について語り、考えた。「吃る人の悩みが深いのは、吃音は治るとの期待を根強くもつからだ。そのため、吃音が治ったら～しようと考えてしまう。治ることを目標にし、治す努力をすれば、自分の人生は見出せない」と、「吃音を治す努力の否定」を提起した。これまで誰もが正しいことだと信じて疑わなかつた「吃音を治す」前提を、吃る当事者が取り去つたのだ。

ある吃る青年との出会い

一言一言激しく吃り、舌が強く出る随伴症状に悩むひとりの青年は、職場では電話をとらず、話さないので仕事にならない。困り果てた上司の、吃音を治すようにとの職場命令で、「吃音を治してほしい」と大学に相談に來た。小学5年生から、民間吃音矯正所に何度も行つたが治らずに随伴症状も出るようになつた。その経験から治りたいと思いながら治療の意欲がなく、生活すべてが消極的だった。「僕は君の吃音は治せない。言語訓練は一切しないが、消極的になつてゐる君の行動を変えていくお手伝いはできる。吃りながら、君のしたいことに取り組もう」

自分で情報を集めて、腹話術を練習し、5カ月後の吃る人の全国大会で発表する課題に取り組んだ。当初は動けなかつたが、腹話術連盟の電話番号だけを教えたことで、仕方なく彼は、初めてひどく吃りながら電話をし、最後まで言い切り情報を得た。この電話をきっかけに彼は変わっていった。200名もの参加者の前で、腹話術を演じた。その後さらに積極的になり、職場でも困ることはなくなつた。目標や目的にしたわけではないが、3年ほどしたら、舌が出る随伴症状は消え、吃音も軽くなつた。

「吃音と共に生きる」との僕の提案に対して、吃音の重い、消極的な人は無理だと必ず批判された。しかし、彼が大きく変化したこと、僕は大きな自信を得た。もし、彼との出会いがなかつたら、「吃音を治す努力の否定」を自信をもつて提起できたかどうかわからない。

(大阪教育大学研究紀要『成人吃音者の一例－治す努力を否定して』 1975年)

全国吃音巡回相談会から吃音者宣言へ

セルフヘルプグループの長年の活動と、この青年とのつきあいで自信を深めた僕は、グループも治療機関もない地域でひとりで悩む人に僕の考えを伝え、話し合つて検証する旅に出た。北海道から九州まで3カ月かけて、全国35都道府県・38会場で、吃る人や親、ことばの教室の先生など600人ほどと、吃音についてじっくりと語り合つた。この旅の中でも大きな収穫があつた。吃音に悩む人と出会う一方で、吃音に左右されず、自分なりの人生を豊かに生きている人とたく

さん出会えたことだ。

僕自身が深く悩んだ経験から、「吃っていれば、吃音に悩むはずだ」との先入観があった。それが破られ、セルフヘルプグループの活動の成果にも確信をもつことができた。

そして、それは、「私たちは長い間どもりを隠し続けてきた…」で始まり、「どもりが治ってからの人生を夢みるより今を生きよう」と呼びかける宣言文につながった。僕が起草したこの宣言文は、反発や批判はあったが、「吃音者宣言」として、会の創立10年の節目に公表した。

(『吃音者宣言 = 言友会10年の活動』 たいまつ社、1976年)

カレー屋の経営と、仕事は変わっても

僕は大学を退職し、カレー専門店のオーナーシェフになった。吃音に取り組める国立大学の教員を辞めることに、ほとんどの人が反対した。辞めるにはいくつか理由があった。僕の主張に、「大学の先生の安定した仕事だから言えることだ。自営業、サラリーマンには難しい」とよく批判された。吃音研究者の枠にしばられない「ただの吃る人」になりたかったのも、理由のひとつだ。店の名前は「タゴール」。言いにくいくて覚悟していたものの、最初の1年は「‥タタタゴー ル」とよく吃了。大学病院前なので、医師の呼び出しがよくある。「第1外科の田中教授」の呼び出しが、「…たったっ…」と30秒ほど激しく吃ることもあった。昔なら、数日は落ち込んだり落としたものの、30分ほどで、「吃る僕が吃るのは当たり前」と気持ちを切り替えることができた。吃音について学んできたおかげだ。

吃る人の世界大会

日本の吃る人だけでなく、世界の吃る人と出会いたい。世界の吃音研究者、臨床家と吃音についてじっくり語り合いたい。世界の最新の吃音の情報を得たい。

1986年夏、僕が大会会長となり、第1回吃音問題研究国際大会を京都で開いた。

11カ国から34人の海外代表を含め、400人の吃る人、臨床家、研究者が集う、文字どおり世界で初めての吃音国際大会だった。京都国際会議場の大きなホールで基調講演をし、最終日に海外の代表と肩を組み、次回のドイツ大会での再会をよびかける挨拶をしているとき、ふと、「どもりでよかった」と思った。その後3年ごとに世界大会が開かれ、ドイツ、アメリカ、スウェーデン、ベルギー、南アフリカ、オーストラリア、クロアチアと、世界の吃る人や吃音研究者・臨床家の交流が続いている。次の第9回大会はアルゼンチンだ。

吃音と上手につきあう講座

国際大会での僕の主張は理解されたが、戸惑いもあったようだ。世界では、「吃音を治す・改善する」には長い歴史があるが、「吃音を生きる」については、具体的にはまったく取り組んでいない。吃音とつきあうための具体的なプログラムを提示するよう求められた。

1987年の4月から、週に一度の大坂吃音教室で、僕は「吃音と上手につきあう」ために、次の3つを柱にした年間45回のプログラムをつくり、毎回資料を作り、講座のすべてを担当した。

高校の入学式で同じ新入生の女の子を見初めた。偶然、二人は卓球部に。間もなく合宿。仲よくなるのには好機だったが、直前に退部した。「吃音(きつおん)」を彼女に知られるのが怖かった。物心ついでころからともっていた。

治そうと、精いっぽい努力した。「矯正所へ行くため」田辺一鶴さんの「講談教室」にも足を運んだ。そこで知り合った仲間十人と言友会をつくったが、治らなかつた。

七

三重県津市出身。明大卒。
現在、全国言友会連絡協議会
会長。大阪教育大特殊教育特

別専攻科講師から6年前、大坂にカレー専門店「タコ」ル」を開いた。42歳。

たが、不治宣言とか
治す努力の全否定と
も受けとられた。
「脱退者も出たし、
臨床家からもしから
れた。だが、とこと

書に書かれたメッセージには、「ぜひわが国のやり方を紹介したい」といったものばかり。とにかく十分に討議して、僕たちの考え方方に沿った研究、指導をしてもらえば

ん悩み、治す努力をしてきた人はわかつてくれました」「

うれしいなあ」
大のカレー好き。カレー専
門店を開いた理由のひとつが

吃音問題研究の国際大会を開く

伊藤伸二さん



際会館で開く国際大
会には、初めて内外の吃音
者、臨床家、研究者が一堂に
会する。外国でもやはり「治
る」論が圧倒的で、参加申込
もも多いし、弁護士も三人い
る。いろいろな職場でももりな
がらも頑張っている人がい
る。このことをわかつてほし
い」（五孝 隆実記者）

薄い且不自信且
嫌悪を深めがち。八
日から、国立京都國
際会館で開く国際大

「約千人の言友会仲間に教員も多いし、弁護士も三人いるがまだまだあるそうだ。

いまも「治る」論
が大勢。治らないの
は努力不足という風
潮に自己不信、自己

「ローン店をつくり、仲間の職場、たまご場にしたかった。まあ、夢ですが」。吃音を理由に勤め先をクビになる

皆て書かれてメツセーヴてま

- ①原因論や治療の歴史、不安や恐れへの対処など、吃音について学ぶ。
- ②自分を知り他者を知り、人間関係について心理療法を学ぶ。
- ③話す、聴く、書く、声の表現など、コミュニケーションの力を育てる。

さまざまな領域から学ぶ

後で説明する吃音氷山説（❶64頁）の水面下の部分である、吃音からくる行動、思考、感情については、臨床心理学、精神医学、社会心理学、哲学、教育学など、さまざまな分野で理論や技法が蓄積され、人間共通の財産になっている。それらは、劣等感、不安、恐怖などへの対処に生かすことができる。吃音に生かせるものなら何でも学ぼうと、年に一度の吃音ワークショップなどでは、さまざまな分野の第一人者から学んだ。

吃音研究の内須川洸・筑波大学教授。演出家の竹内敏晴さん。アサーティブ・トレーニングの平木典子・日本女子大学教授。詩人の谷川俊太郎さん。論理療法の石隈利紀・筑波大学教授。芥川賞作家の村田喜代子さん。人間関係の村瀬 ひらせ あきら 晏・慶應大学教授。映像作家の羽仁進さん。劇作家・演出家の鴻上 こうかみしうじ 尚史さん。自己概念教育の梶田叡一・兵庫教育大学学長。交流分析の杉田峰康・福岡県立大学教授。文化人類学者のデイビッド・レイノルズさん。トランスパーソナル心理学の諸富祥彦・明治大学教授。笑いの芸人・松元ヒロさん。日本笑い学会会長の井上宏・関西大学教授。認知療法の大野 おおの ゆたか 裕・慶應大学教授。直木賞作家の重松清さん。パーソンセンタード・アプローチの村山 むらやま しょうじ 正治・九州大学教授。アドラー心理学の岸見一郎さん。

学んだことは、すべて書籍や冊子になり、僕たちの活動を支えてくれている。

吃音親子サマーキャンプ

僕たちは学童期・思春期、吃音に深刻に悩んだが、真剣に向き合い、学んでこなかった。だから、「ゼロの地点に立つ」ことが難しかったのだと考えた。僕たちの経験を子どもたちに伝えれば、吃音を否定し、話すことから逃げる、学童期・思春期を送らずにすむのではないか。早期に、吃音に向き合い、吃音とのつきあい方を学んでほしい。「ゼロの地点」に立ってほしい。

1990年、小学生から高校生までを対象にした、吃音親子サマーキャンプを始めた。

- ①吃音についての話し合い：臨床家と吃る人が入り、同年齢の子どものグループで話し合う。
- ②劇の稽古と上演：吃りながら他者に働きかける、ことばの力を体験する。
- ③親の学習会：吃音だけでなく、子育てに必要なアサーションなどを学ぶ。

全国からスタッフをあわせて150人ほどが参加するが、僕たちの予想したとおり、子どもたちは変わり、小学低学年の子どもが「ゼロの地点」に立ち、自分の道を歩み始めている。

この活動は、TBSのドキュメンタリー番組「報道の魂」（2005年10月16日放送）や、TBSニュースバード「ニュースの視点」（2005年10月24日放送）の40分の番組で紹介された。そのDVDの映像は、小学3年生の子どもたちがどのような話し合いをしているか、どんなキャンプか、よくわかる映像教材となっている。

（教材の問い合わせは、日本吃音臨床研究会へ）

◎おわりに

この本を、私の信頼する15人の仲間と、企画の段階から最後まで、一緒に取り組めたことが何よりもうれしい。何度も合宿し夜を徹して吃音について熱く語り合えたことは、私にとって至福の時間だった。まず、その仲間と、本の完成を喜び合いたい。

私たちの後ろには、大勢の吃る人、吃る子どもも、吃る子どもの親、臨床の同行者がいる。その人たちに深く感謝したい。その大勢の人たちとの出会いがなければ、この本は書けなかつた。

この本は、吃音に深く悩んだ私の人生がベースになっているが、本書の編著者16名のうちの7名が、吃音に悩み、治したいと願ってきた。そして、9名は、吃音を治したいと願う吃る子どもや、保護者と向き合ってきた。吃る子どもや親の、吃音を治したい思いは理解しつつも、私たちは「治さない、治せない」との立場に立ちきる。

2005年夏、千葉市での言語障害教育の研修会で講演した夜、ホテルの一室で深夜まで、顔を寄せ合うようにして、「仲間と一緒に出したい3冊の本」について話し合ったことが、この本のスタートだった。『どもる君へ いま伝えたいこと』(解放出版社)の次がこの本だ。

取り組み始めても、仲間のいわゆるマニュアル本に対する抵抗が強く、進み始めては後退したが、出版への背中を押したのは、アメリカの方法が唯一のものとなることへの危機感だった。実践を出し合い、話し合い、整理したが、予定の紙数をはるかに超えてしまった。私たちでなければ書けない吃音に直接関係するワークは残し、せっかくメンバーが書いたワークや実践の多くを事業仕分けで涙をのんでカットした。大事にしていることは外せなかったので、ワークブックと言いながら、解説の多いものになったのは予想外だった。

特別寄稿の石隈利紀・筑波大学教授には、編著者として教師の会に加わっていただく予定だった。しかし、特別支援教育の大きな流れのなかで、仕事が山積し、石隈さんも迷った末に特別寄稿になった。本の制作状況を報告し、常に見守り、支えてくださったことに感謝します。

長年活動を共にする、吃る人のセルフヘルプグループ、NPO法人・大阪スタタリングプロジェクトの活動がなければ、ワークブック形式のこの本は書けなかつた。ワークの多くは、同法人が毎週金曜日に開いている大阪吃音教室のプログラムがベースになっているからだ。

この本は、吃音に深く悩んできたひとりの男の人間ドキュメンタリーでもある。21歳で「ゼロの地点」に立ってからのさまざまな人との出会いを思い出しつつ書いた。竹内敏晴さんをはじめ、たくさんの人から多くのことを学んだ。そして、支えていただいた。孤独で、吃音をうらみ、吃音が治ることばかりを考えていた私だったが、今は、たくさんの仲間がいて、吃音一筋に人生を送ることができてするのが不思議でならない。出会った大勢の人々に感謝します。

解放出版社からの吃音に関する本は3冊になった。「この本に出会えてよかった」などの読者カードを感激して送ってくださり、常に励ましてくださる編集部の尾上年秀さんに感謝します。

2010年4月28日 66歳の誕生日に

伊藤伸二